
マジック・パレス

才谷草太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジック・パレス

【Nコード】

N1746R

【作者名】

才谷草太

【あらすじ】

ある砂漠の国で、女と魔道士の出会いがあった。この出会いが何を意味するのは、まだ分からない。全ては、かつて大魔道士と言われた「キース」の名が結び付けて行く。

解放

砂漠の国、マルキト。

広大な砂の中に突如広がる砦の中にそびえる無垢な白さを誇る王宮。オアシスに栄えた国だ。

人々は思い思いの商いを行い、ごく稀に来る旅人や行商から砦の外の世界を感じる。

完全に遮断された世界…。

そこから出る事は許されない。

入る事ができるのは、極限られた、滞在期限付きの人間達。

水を求め砂漠を彷徨う瀕死の人間すらも、砦の中には入れない。

一部の貴族・王族の為の国…。

「ねえ、もつと果物は無いの？ 最近少くない？」

「勘弁して下さいよ…。最近行商の者も少ない上に、こう水が無いんじゃこれでも多い方ですよ」

店の主人は女性客に向かって、何とかこれで勘弁しろとばかりに言う。

「もつ…。無いんじゃないで、こつちには流れないだけでしょ？」

女性客は店先でそう言い、冷たい視線を無垢の白壁でできた王宮

を見上げる。

「冗談じゃ無いわよね…。あの中じゃ毎晩宴会やってるって話じゃない。あんたの店も、王族御用達なんでしょ？ ちよっとはこっちに回しなさいよね！」

「お客さん、声が大きいです…。もう帰って下さい！」

店主はそう言つと、女性客を店先から追っ払い、ソワソワしながらまた店の中へと戻って行つた。

「何よ…。毎日毎日店先の果物が減ってるじゃない。入荷してくせにこれ見よがしに減らされると、みんな気が付くわよ…」

ムスツと頬を膨らませ、他の店で良い商品が無いか物色して回る。

ふと気が付くと、中心街から程遠いスラムに差し掛かろうとしていた。

「あれ…？ 何で私こんな所まで来てるんだろ…」

自分でも、不思議に足が向いて来ていた。普段なら決して近寄らない場所。ここは皆の外から流れ着き、不法滞在している者や、王国内で何かしらの罪を犯し、逃げている者の溜り場だった。

彼女は恐ろしくなり、その場から去ろうとするが…。その視線の先に、ある奴隷市場を見付けた。

普段から奴隷という物を見慣れてはいるが、彼女の家は着けていない。人を売り買いなどする物では無いと、代々それを守って来た、希少な家系だった。しかし、その場に居る奴隷は何か空気が違っていた。

恐る恐る近寄り、頭から被ったマントを覗き込む…。

「ひゃっ！！」

驚いて尻もちを着く。

「どうした、姉ちゃん…。身なりからして2級貴族か？」

彼女の背後にある酒場の客が声をかける。

「2級貴族が何しに来たんだ？ 自ら奴隷を物色しに来るとはな…。慰み者にでもするつもりか？」

酒に酔ったスラムの住人は、大声で笑いながら女性に近付く。

こんな男達に囲まれたら、どうなるか位は想像ができる。が、逃げようにも既に囲まれていて、更に腰が抜けてる。

『何でこんな所に来たんだろう…。もう、終わり…』

涙を流し、声すら出せない恐怖の中、声が聞こえる。

「こちらへ。這ってでも来て下さい」

誰？と頭を振り周りを見る。声がしたのは…正面から？ 迷いながらも正面をもう一度見ると、頭に被ったフードを取った男が彼女を見ていた。腕には小さなタトゥーがあり、太くて何かが書かれた手錠が付いている。年齢は40程だろうか…。疲れた表情と、シワが目立つ。短い黒髪に、小さな体。

頼りにならないと思える風貌だが、彼女は四つん這いになりながらも這い寄った。

「何だ、お嬢ちゃん…、エクセルがお好みかい？ 代わりモンだねえ…。俺らの方がずつと楽しめるぜ？」

『エクセル…この人の名前？』

黙って奴隷の男を見上げるが、彼は黙って酔っぱらい達を見つめている。

「ダメダメ、そいつ口が利けねえから」

愉快そうに酔っぱらい達は笑う。

もう、既に三十人を超えただろう…。

「助けて！」

彼女は無意識に奴隷の男に向かって助けを求めた。

男はゆつくりと立ち上がる。

身長は150程の小さな男。どう見ても頼れるとは思えないが、口の利けない筈の男から発せられたと思われる『声』にすぎるしか方法は無かった。

小さな体に似合わないマント。地面を引きずりながら酔っぱらいの輪の中に歩いて行き、中心で立ち止まる。

「何だエクセル、お前俺達に文句でもあるのか？ エエ？ 何十年も買い手の付かねえ奴隷がよ」

またも愉快そうに笑う酔っぱらい達…。その笑い声の中、男は女を振りかえり見つめる。

『え…何？？』

また、声が直接頭に響く。

「解放する…？ キース…？ 言えば良いの…？」

「何言つてんだ？お嬢ちゃん」

酔っぱらいの群れは、男を無視して彼女に近寄り腕を掴み上げる。

「痛い！ 放してよ！」

「良い女じゃねえか、俺が最初に貰って良いか？」

酔っぱらいの一人は、顔を近づけて匂いを嗅ぐ。

「酒より酔いそうな匂いだぜ、おい、たまんねえぞ！」

「キース・ガードナー・プロイス！ 汝を呪縛より解放します！」

「何言つてんだ？こいつ…」

「良いから犯せよ、後が悶えてんだぜ？」

彼女を取り巻く数人が、モゾモゾしながら不気味な笑みを浮かべる…。が、その背後の人混みは消えていた。

「すまない、彼女を離してはくれないか？」

「あん？…誰だお前…！！！」

声を掛けられ、振り向いた数人は呆気に取られた。あれ程大勢居たスラムの住人が消えていたのだ。

「私は、貴方がたが『エクセル』と呼んでいた男…」

「お前が…エクセルだと？」

女の腕をつかんだ男は、その『エクセル』を下から上まで眺める。が…、身長は180センチ程あり筋肉質、髪も白銀で長め。年齢は25歳程だろうか…。似ていると言えば、瞳の色だけだった。

「……誰だ、おめえは……」

ようやく女の腕を離れた男は身構える。そしてそれに釣られる様に取り巻き数人も身構える。

「よせ、生身の人間と戦える様な男じゃないんだ」

「なんだそりゃ！意味が分かんねえ！」

その言葉を合図に、数人の男が殴りかかる。

「お怪我はありませんか？」

『エクセル』は女の前に片膝を着き、右手を自らの左胸に当て頭を下げる。

「あ…あの…エクセルさん？ ありがとう…」

「私の名は、キース・ガードナー・プロイス…。貴女に呼ばれた魔道士です」

「あつ…」

彼女は、自らが名乗った事を思い出した。

「今、語るべき事はありません…。再び私に封印の枷を掛けて頂きたく思います」

キースはそう言うと、自らの左手で先程まで両腕に課せられていた物を差し出す。

「そんな…私には…」

「大丈夫です、貴女は私に出逢った。今は出逢う事が運命だったのです。次にお会いした時、全てを知る道へと歩みだすでしょう…」

キースの深い青色の眼に魅入られる様に、彼女は枷を課した。

その瞬間、今度は15歳程の少年の姿になり、髪もボサボサの黒髪になった。しかし、目の色と腕のタトゥーはそのままだった。

少年は、やはり言葉が話せなくなった様子で、彼女にニツコリと微笑み、元居た椅子に座った。

「私…帰って良いんですか…？」

少年に問いかけると、嬉しそうに笑顔を浮かべ、頷いた。

彼女は急いで家へと向かう。

その表情は、何故か爽やかに笑っていた。

数分後…。キースの目の前の空間が捻じれて、大勢の酔っぱらいが出て来る。まるで水面から上がって来るようにゆっくりと…。

全ての体が、その捻じれから出た者から順に、背後に吹き飛ぶ。

愉快そうに笑う少年は、その日からスラムの中心となって行った…。

伝承

砂漠の国、マルキトは円形の城壁に囲まれている。その内側には、外周からスラム街、兵士寮、商人街、2級貴族街、農地・蓄膿産業地、1級貴族街、そして王宮警護兵士街の中に王宮、という作りになっており、それぞれの間には水路が作られている。

この8層にも及ぶ城壁の内部は、半径約7kmという広大な土地になっている。

遙か東の山々からの雪解け水が、この地に7か所の水源を与えていた事で、砂漠の真ん中にこれ程の街ができた。

経済は主に農作業・畜産業だが、その中核を担っているのは2級貴族。彼等は1級貴族から土地を借り受け、そこで産業を起こす。そして土地代を1級貴族に支払い、1級貴族はそこから税を納める。

土地を借りた2級貴族達はスラムから奴隷を買い付け、彼等に仕事を手伝わせ、それを売り生計を立てている。無論、そこにも税金が発生する。

事実上、働かずして生計を成しているのは1級貴族と王族だった。千年という長きに渡り作り上げられたその制度は、最早一部の者達だけの利益を得る物になっていた…。

その広大な中を、スラムから2級貴族街へと帰って来た女性。決して広いとは言えない庭先で老婆を見付けて走り寄った。

「ただいま、お婆ちゃん…。どうしたの、慌てて…」

「ああ、アンかい。…いや、何でも無いよ。それより果物はどう

したんだい？」

庭先で何やらオロオロとしながら東の空を見ていた老婆は、誤魔化しながらもアンに聞く。

「ダメ…。殆ど王族に扱られてるっぽくて、目ばしい果物は無かったわ」

「そ…、そうかい。折角の誕生日も、それじゃケーキも作れないね」

「良いわよ。二十歳になった所で何も変わらないし、1級や王族みたいに、特に何かを許される訳でもないんだから」

アンはつまらなそうに両手を頭の後ろで組み、東の空を見る。

「で…何かあったの？」

アンに聞かれた老婆は、悟られまいと平静を取り戻しつつ、ふとその服装に目を付けた。

「アンや…。お前、どこかで転んだのかい？」

アンも自らの服を見る。

薄い黄色のスカートの裾、尻。そして白い上着の袖が汚れていた。恐らくスラムで腰を抜かした時と、腕を酔っぱらいに掴まれた時だろう。

「あ、ちよつと道を間違えてスラムに入っちゃって…」

「スラム！？　ウチは奴隷なんか買わないよ！何だってスラムなんかに…」

「だから間違えたんだって…。でも、不思議な人が居て、助けてくれたよ」

アンは老婆に、スラムで起こった不思議な出来事を話した。

老婆はその話しを不機嫌そうに聞き始めたが、手錠を取り、男が

変貌した所から妙に興奮をして来た。

「そ…その男は確かに『キース』と名乗ったんだね!!?」

「ええ、私はそう呼んで手錠が外れたし、本人もそう言ってたから間違いないんじゃない?」

老婆はアンの肩を強く掴み問い質していた。その勢いに負け、意味が分からずも多少驚きを含ませて答えるアン。

「おお…おお、前兆は正しく伝承の通りか」

「伝承? 何それ?」

「バルジー! バルジー!」

老婆は興奮しながら裏にある畑にいる男に声を掛ける。

「何だ母さん! 用事なら後にしてくれ、もう少しで…」

遠くからバルジーと呼ばれる男は答えるが、その言葉を遮る様に老婆が口を挟む。

「キースじゃ! キースが目覚めた!! 宝玉のヒビはこの事を告げたのじゃ!」

アンは何が起きてるかさっぱり分からない。が、バルジーはその言葉を聞き、鍬を地面に刺したまま鼻息を荒げて飛んで来た。

「何だつて? 単なる昔話じゃないって言うのか!?」

「だから言っておったじやろう! いずれ旅立つ日が来ると!

さあ、準備を整えるんだよ!」

「…いや、無理だろう…俺はもうすぐ五十八にもなる…。長旅なんか出来ない…」

二人は、その言葉の直後にアンを見つめる。その首が動く勢いは物凄かった。

「…え？ 何？」

口元しか笑えないアンは、その二人に圧されて後退りする。

「そうか、アンが『大賢者様』に逢ったのも、運命という事が…」

この老婆の言葉に、アンはハツとした。

あの魔道士も、『出逢う運命』と言っていた。

「と…父さん？ お婆ちゃん？ 私、意味が分かんないんだけど…」

動揺しながらも不安を押し殺して、その二人に聞く。

「とにかく家にお入り。バルジー、直ぐに宝玉を持ってキッチンに来るんだよ！」

二人の慌て振りに、ただ事ではない事は直感で知る事ができたが、ただオロオロとするばかりで庭で右往左往していた。

「何してんだい、アン！」

老婆に後頭部を叩かれ、家に引き込まれる。

そして父は、2階の隅に丁寧に祀ってあった『家のお守り』を持つて来た。

「あれ？ それってお守り…宝玉ってこの事？」

深い青色で、透明度がある玉。ただのガラス玉かと思っていたが、そのヒビが入った所が光っている。

「あの人の目の色と同じだ…」

そう、アンが最初に顔を覗き込み、腰を抜かしたのは、その瞳の底知れない何かを感じ取ったからだだった。

「アン、良いかい…。これから話す事を良く聞くんだよ？」

老婆は声を潜めて、話し出した。が、真昼間から蠟燭に火を灯し、その火に近寄る演出は無用だと、バルジー共々感じていた…。

千五百年前、遙か東の大陸では、魔法技術が優れた国が發展していた。人々はその力を使い、平和に暮らしていたが、近隣の国からは「魔王の国」と畏れられていた。

ある日、北の大陸から来た侵略者は、その魔法力を欲し、三十年に及ぶ大戦へと突入した。東の国の民は自らの国の防衛のみに尽力し、決して北方の侵略者を襲う事はしなかった。犠牲になったのは魔法力を持たない東の国の民達。その後、侵略者達は諦め、北へと帰るが、東の国の国力は疲弊し、満身創痍となった。

そうなたら近隣諸国が黙っていなかった。

魔法力を奪おうと、一気に攻め込む。

最早抵抗する術は無かった。魔法の知識を奪われ、力を果たした魔法使い達も次々に倒される。

そんな中で、一人の男が立ち上がった。

彼は、持てる知識と力を全て使い、東の国を封印。同時に、魔法力を奪った侵略者達も封印し、双方の封印を遠く離れた所へと飛ばす事に成功する。

ここに、戦は終了するが、その男は自らの力を求め、悪用する者が現れる事を忌み嫌い、それすら封印し、砂漠のオアシスへとたどり着く。

そのオアシスには小さな町があった。

彼は、その中である一族を選び、自らの力を封印した玉を渡した。
『この玉が碎ける時、あなた方の一族の末裔をお借りしたい。共

に旅をし、再び蘇る悪しき魔法使いを討ち滅ぼす為に」

更に、彼はもう一つの物にも力を分け、封印していた。そして、それはまた別の一族へと渡す事を選ぶ。

『世が乱れ、国が乱れた時、私はこの剣を再び訪れます。それまで、どうかおあずかり下さい…。それまで、きつとあなた方一族を守り、栄えさせてくれるでしょう』

こうして、彼の力は二分され、オアシスの町へと齎された。が、剣の一族は他の一族に「玉」が委ねられている事を知らない。

マルキトは栄えた。剣と宝玉の魔力によって。

魔法使いは、玉の一族に願いをした。

「私の力は残っている。言葉は力の源です。どうか、この手枷を私に付けて下さい。遥か後、世が乱れる時、あなた方の末裔がこの封印を解きます。玉が割れた暁には、どうか、よろしくお願いします」

この国を作った者達は、この宝具を守る為に、強固な城壁を作り、秘密を洩らさぬ為に外界との交流を絶った。

彼の名は「キース」。龍と契約を結んだとされる『大賢者』

* * * * *

「ウチが、その宝玉を守ってた家系？」

アンが二人に聞くと、うんうんと頷く。

「1級貴族でもないのに、宝具を？」

「剣の一族も、我々の存在は知らん…。じゃから、無暗に話さん様に子供の頃には話さんかったんじゃ」

「でもおかしいわよ？ だって、あの人は自分の事を『魔道士』って言ってた。『賢者』でも『魔法使い』でも無かったわよ？」

「伝承じゃ…。長い年月で、恐らく変わった所もあるじやろう」
「じゃあ、名前が違ってる事もあるんじゃない？ 人違いかも…」

「アン、お前さんの話しから聞くと、悪い男では無いんだろ？ 連れて来れば良いじゃないか」

バルジーが口を挟むが、アンは首を横に振る。

「彼は奴隷だったよ？ ウチは奴隷は買わないんでしょう？」

「大賢者様の解放の為じゃ。アン、行っておいで！」

「え…でも、乱暴されそうになつたし…すぐには行きたくないよ」
顔を強張らせて言う。

「仕方無いね…、アンが落ち着いたら、バルジー…連れて行ってやんな」

「俺かよ…。俺だってスラムになんか行きたくねえけどな」
頭をグリグリ掻きながら答える。

逃亡すらも許さない国。それは、城壁と住民の間に兵士が住むエリアと、更にその向こうには無法地帯・スラムがある所が大きかった。

故に、暗部を黙殺している。

が、この日よりスラムの動きに変化が出る事は、誰も予想しなかった。

ゼノとエクセル

アンがスラムでキースに出会った数日後、そのスラムには異変が起こっていた。

『エクセル』として、数十年そこに住んでいた男を、周囲は徐々にある共通の意識を持って見出していた。と、言うのも先日まで四十歳程の小柄な男だったにも関わらず、今は十五歳程の少年となっていたのだから。

無論、初めは誰もが半信半疑だったが、腕にあるタトゥーと、その瞳の色、そして日々の暮らし方がかつての『エクセル』そのものだった事で、徐々に認め出した。

兵士寮から中心は立派な石造りの建築物が広がるが、スラムは殆どが木材で作られている。

木材と言っても、砂漠の真ん中では貴重な物なので、その材質は極めて悪い廃材としか言えないのだが、そんな中で生活をしていた彼らには彼等の秩序があり、スラムに4つの『勢力』を作り、それぞれがパワーバランスを保って、それなりに平和な生活をしているのだが…。

「なあ、エクセル。お前が俺達をすっ飛ばした力、もう一度見せてくれねえか？」

エクセルの椅子の前には、アンの腕を掴んでいた酔っぱらいが地べたに座り、話しかけていた。

「相変わらず、口は利けねえか…。お前の力が本物なら、俺達をここから解放してくれるんじゃないかねえかと、みな期待してんだぜ？」
ニヤツと笑いながら、エクセルに語りかける男。しかし、少年となったエクセルは、その男の目をじっと見つめたまま、何のリアク

シヨンも起こさない。

「やめろよ、ゼノ。そいつはやっぱりエクセルだ。口も利けねえしこちらに興味もねえ…最初の計画通り、他の3つのチームと協力するしかねえ」

「やっぱり、あの女の力が無えと無理なのか…かと言って、俺達がスラムから出るには、リスクが高すぎる」

ゼノと呼ばれた男は、三十代半ばと思われる。このスラムのエリアーダー的な立場であり、盛り上がった筋肉と、『キース』と同じ程の身長。少しウエーブがかかった金髪ではあるが、埃を被ったそれは茶髪にすら見える。髭面で汚れた顔だが、眼光は鋭い。

「こいつがまた変身でもしねえ限り、俺達のスラム暮らしはまだ続きそうだな…」

ゼノはその場にゴロつと寝転がる。

その目は城壁からも見える空に向かう。

「商人として此処に来て、俺はもう八年になるぜ…。やつこの思いで辿り着き、中に入ったは良いが出るのに金が掛かるなんてよ…」

「このスラムで、外から来た奴等は皆、そうさ。まあ、代々スラムで生活してるって変わり者も居るが、唯一の救いは女も大勢居るって事だ」

ゼノはスラムに来て十年程が経っていた。元は商人で組織された旅団の護衛として雇われた傭兵だったが、その旅団が出国する際、ゼノの出国料を支払えなかった。無論、ゼノだけでは無く他にも数人の傭兵が出国できなかったのだが、他の者は全員奴隷として買われたか、王族の玩具として扱われ、死んでいった。同じように、他の商人旅団として入国し、出国できなかった女性も大勢おり、ここで家族を作り、死んで行った者達も大勢居る。

「外を知らねえここの貴族共は、何も感じちゃいねえだろうが、

監獄と何ら変わりねえよ……」

ゼノは青空を見上げながら、スラムから見る城壁の無い世界を思い出していた。

何かが変わりつつある事を予感しながらも、自分ではどうしようも無い事も分かっていた。

「ルシア、他の勢力に伝えて貰いたい事があるんだが、走って貰えるか？」

ルシアと呼ばれた元商人は、怪しい笑いを浮かべながら聞き返す。
「何だゼノ。珍しく真剣じゃないか……。この辺りの奴等が、あなたの指示に逆らう訳が無いだろ」

「指示じゃねえ。これはお願いだ」

「……何だ？ どちらにしても聞くぞ？」

ルシアは真面目な顔で立ち上がり、衣服を正し始めた。……と、言っても簡素な布一枚で作られたような物ではあるが……

「暫くは強奪や誘拐、喧嘩、殺人は止めろと。マルキトは、恐らくこの後何らかの変化が出る。その時期を待ち、一気に動きを掛ける。4つのスラムは呼吸を合わせ、行動を共にして欲しい……と」

「……反乱でも起こす気か？」

ルシアはそこからでも見える、マルキト中央に座する白い王宮の壁を、遠く眺めている。瓦礫とも思えるスラムの隙間から、屋根の低い町をすり抜け、それでも尚見える王宮……。

「エクセルと、あの女だ。こいつ等が会う時、何かが起きる。その時に合図をする」

「信じると思うか？ 他の奴等が……？」

「エクセルの事は他のスラムでも有名だ。無気味な奴だつてな…」
ゼノはムクツと座り、エクセルを見つめる。

エクセルは今までの会話を聞いていたのだろう。少年の顔のまま、初めてスラムの男達に感情を出した。

「ははっ、見たかルシア。こいつ笑いやがったぜ、何かしやがるつもりだ」

「だな…、分かった、何人が連れてスラムを回って来る」

「武装はするなよ、こちらに他意がねえ事を分かってもらう為にな」

ルシアは頷き、ワクワクした表情でその場を歩き去った。

背後の酒場では、あの時と同じように大勢の男達が居る。が、この時は誰も酒を口にしていない。

要塞の中は、静かに、確実に変わろうとし動きが生まれて来ていた。

「お父さん… 本当に行くの？」

「仕方無いだろう…、婆さんが言い出したら聞かん事はお前も知ってるだろ？」

スラム手前にある兵士寮近くを歩きながら、アン親子はブツブツ言いながら進んでいた。

その先にはスラムがある。勿論行き先は『キース』が居た場所。

「嫌だな…、お父さん一人じゃ心細いし…」

「悪かったな、俺だって鍬しか持った事が無いんだ、護衛として見られちゃ堪らん」

ルシアが出発して数日後の事だった。

スラムに入ったアン達は、無気味な光景を目の当たりにした。

普段なら眼光鋭く睨みつける住民たちが、今は笑顔で見ている。

それもバカにしたような目では無く、何か希望に満ちたそれを向けていた。

「何だか気味悪い…」

アンは思わず父親の腕に捕まるが、父親も猫背になり怯えている。

「頼りないな…もう！」

そんな親子は、周りに期待(?)されながらも、キースの元へと辿り着く。

「彼か…??」

「うん、彼」

「子供じゃないか…」

「だから言っただじゃん、子供になったって」

二人の会話は、互いに短い。更に父親の方は呆気にとられている。

「しょうがないな…もう…、見ててよ？」

アンはそう言うと、キースに一步近寄り解放の言葉を口にする。

「キース・ガードナー・プロイス！ 汝を呪縛より解放します！」

その言葉に慌てたのは、誰でも無い『エクセル』だった。が、既に遅かった。

彼の身体を中心に、空気が膨張し風が舞う。そして、その中心から銀髪の男が現れ、脚元には手錠が転がった。

呆氣にとられたのは父親と、キース本人。周囲のスラム住人は、大歓声を上げていた。

その予想外の大歓声で、今度はアンも呆氣にとられる。

その歓喜の中に、ゼノも居た。

この瞬間から、止まっていた物が動き出した。

スラムでの真実

スラムの大歓声に包まれ、アンとバルジは戸惑いながらキースに近寄った。その足取りは、大歓声を上げるスラムの住人を見まわす様に、グルグルと回りながら、戸惑いながら。そして、その先に佇むキースは、少々困惑していた。

その大歓声を掻き分ける様に、ゼノが出て来た。

アンはゼノに気付き、足を止める。あの日の恐怖が頭をよぎった。だが、ゼノは両腕を水平に上げて歓声を止める。その統率力は、アン達を更に怖れさせた。

「先日の事は悪かった。俺の名前はゼノ…この辺りのスラムの代表って所だ」

だがアンは警戒しながらキースの方へと歩み寄り、背中に隠れる。バルジはこの男と何かあったと直感し、アンの横に立ち警戒を解かない。流石に父親かと思ったが、それでもキースより一歩下がってゼノを睨む。そんなバルジを、横目で覚めた目で見るアン。

「スラムのリーダーだ、怖くて当然だろ？そんな目で見るな…」
我が父親ながら、少々情けなくなつた。

「大丈夫です、彼等はもう貴方がたに手出しはしませんよ」

呆れながらも背後のアン達に声をかけるキース。

「…あんた、本当に『大賢者』なのか…？」

その言葉に反応したのは、キースとゼノだった。やはりコイツは只事では無かった、と直感を信じていたゼノは、胸の奥から歓喜の感情が込み上げていた。

「申し訳ありませんが、私は賢者などではありません」

背後を見ながら、申し訳なさそうに言うと、今度はゼノに向かい

言う。

「ゼノ、人が居ない場所に私達を連れて行って下さい」

「無茶言っな、お前はまだ買い手の付かねえ奴隷だろ。スラムにはスラムの秩序がある」

「なら、私達が彼を譲り受けます。誰に言えば良いですか？」

キースの背後に隠れていたアンが言う。バルジは若干動揺しているが、変身の現場を見た以上、賢者で無くとも何らかの力を持っている事は明白で、宝玉と無関係とも思えない。

「ユキト！ エクセルに買い手が着いた！ さっさと商談に入りやがれ！」

ゼノは大声で、キースの居たボロ屋の奥に声を荒げた。アンとバルジはビクツとして振り向く。

「こんな面白れえ奴を売るにや、勿体無えが…ゼノの命令じゃ仕方ねえな、ヒヤヒヤヒヤ」

歯の抜けたスキンヘッドの、初老の男が出て来た。

ここスラムでは、もう既に『キース』が『エクセル』だと認識されていた事にアンは驚いていた。四十代の男が二十代になり、次は十代にと、常識では考えられない変化を遂げていた男を、すっかりと認めていたのである。

だが、アンは知らなかった。その背後にあったスラムの事情を。

結局、キースは15,000ベルドという値で話しが着いた。

当初は40,000ベルドという金額を示したが、ゼノが商談に割って入り、ここまで値下げさせた。

「全く、ひと月のコイツの食費にすらなりやしなかったぜ…」

ブツブツ言いながらユキトは奥へと下がって行った。

人生で初めて奴隷を買った背徳感で、アンとバルジは言い難い気持ちになっていた。

「キース、ごめんなさい。こんな形でしか貴方を自由にできなくて…」

「いえ、それは仕方のない事。それよりも勝手に解放した事をご注意させて頂きたいですが」

そこまで言うのと、すぐ近くでニヤニヤしていたゼノに対し、

「さあ、今すぐ人の居ない場所へ」

「あ…ああ、そうだな、俺のウチに來い。お前らの感覚からすると、馬小屋にも劣るだろうがな」

豪勢に笑いながら外に出るゼノ。

「行きましょう」

そう言つて、店先に落ちてしている手錠を拾い、ゼノの後に続くキース。

「スラムのリーダーの家に行くのか…？」

「…みたい…キースが居るんだから大丈夫だろうけど、ちょっと抵抗あるね…」

苦笑いをしている親娘は、互いに目を見て苦笑いをする。

「何してる！ 早く來ねえか！」

ゼノの聲に反応して、「はい！」と弾ける様に立ち上がるアンとバルジー…。

この四人が連れだつて歩いて行つたあと、店先に集まっていた者達は、一斉に歡喜の声を上げていた。

「何？あの歡聲…」

背後から浴びせられる聲に、アンはビクビクしながらキースのマ

ントを掴んでいた。もう既に父の腕では無い事に、バルジーは若干落ち込んでいた。

「こっちの都合だ。お前達に直接関与はしねえと思うから、心配はねえ」

ゼノは歩きながら言う。が、四人の歩く道は、両脇にスラムの者達が何かを期待したように目を輝かしている。アンは両手でキースのマントに捕まりながら歩く。

「ここだ、遠慮しねえで入ってくれ」

案内された家は、あちこちに穴が空いた廃材でできた小屋。

「ホントに馬小屋以下だな……」

ついポツリと言ったバルジーを、ゼノは睨む。

「あんた達には分からねえだろうな、それでも立派だつて事がよ……」

バルジーは流石に頭を下げ、謝った。

奥に入ると広さはそこそこ。部屋の中に水路が引き込んであり、ボロボロだがベッドもある。

更に床に穴が開いており、階段がある。

「入んな」

ゼノはそう言いながら、穴の奥へと向かった。キースが後に続き、バルジーも恐る恐る着いて行く。

アンはぐるっと部屋を見渡す。丁度裏庭に当たる場所の隙間から、小さな畑が見えた。

「自給自足……してるんだ……」

ポツリと呟きながら、最後に階段を降りる。

ランプが灯った地下室は狭く、中心にテーブル、壁には恐らくこの街と思われる地図が貼られていた。

「エクセル、ここなら外に声は漏れねえ…、使ってくれ」

ゼノはそう言つと地下から出ようとするが、キースが呼び止める。

「貴方もここに居て聞いて下さい。真実を知る義務があります」

「義務だと？ ははは、面白え…。権利は好きだが義務は嫌いだが興味はある」

ゼノはそう言つと身体を翻し、テーブルへと向かった。

椅子は無い。みな、立つて話しをするしか無い地下室で、キースは口を開く。

「この国の成り立ちと、今、世界で起きようとしている事を話します」

「成り立ちだと？ ただの独裁国家のオアシスって訳じゃ無えのか…？」

「ええ、千年に渡る国の成り立ちは封印され、その存在理由すらも道を誤っています」

「賢者様…、道を誤るとは、違う方向に進んでいる、と言う事ですか？」

「バルジーさん、私は賢者ではありません、ちゃんとお話しをしますが、あなたの方の家に伝わる伝承ですら、恐らく千年の間に変わっているでしょう」

やはり伝承を知っている。賢者では無くとも、あの話に関わっている人物だとバルジーとアンは確信した。唯一話しが分かっているのは、ゼノ一人だった。

「待て、伝承とか言われても、俺は知らねえぜ？ 中に入れるな

ら、そこから話しやがれ」

ゼノの言葉に頷きながら、キースがバルジーに向かって言う。

「そうですね…、もう彼に隠す必要はありません。貴方の家系に伝わる伝承を、私にも聞かせて下さい。真実はその後にお話しします」

戸惑いを見せ、アンを見る。

どこまでも頼りない父親だった。

「言つてよ、私を見たつて仕方無いでしょ？ 私だつてこの前初めて聞かされたんだから、お父さんが話した方が分かりやすいわよ！」

「何でえ、頼りねえ親父さんだな、大丈夫か？」

ゼノはニヤツと笑いながらバルジーを見る。

バルジーは仕方無く伝承を口にし始めた。流石にゼノは衝撃的だっただろう。アンも未だに信じ難い所が多くあるが、キースがここに存在している、という事だけが唯一伝承を信じる鍵となっていた。それはゼノも、バルジーも同じ事だ。

だが…

「やはり、真実が多少なりとも狂っています。これでは剣の家系も狂いを生じて仕方ありませんね」

キースはその言葉に続き、真実を口にし始めた。

その内容は、伝承として伝わる物よりも衝撃的だった。

千五百年前の真実

薄暗い地下室で、三人の男と一人の女がテーブルを囲んでいる。
白銀の髪を持つキースは、ランプの光に照らされながら、真実の
序章を口にし始めた。

* * * * *

全ての始まりは千五百年前だった。

遙か東にあった国「クルド」は、当時でも原始的な国であり、農
耕民族・狩猟民族の集合体だった。

国は平和だった。ある旅人が来るまでは…。

遙か北に位置する王国「マスカル」からの逃亡者：彼を温厚な「
クルド」の民族は受け入れ、国の民として生活を送っていた。しか
しある日、その男が不思議な力を使う。何も無い所から火を起こし
たのだ。

それだけでは無い、水を出し、風を起こし、自然万物を意のまま
に操ってみせたのだ。

「クルド」の民は怖れた。神で無ければ悪魔の使者だと。そして、
彼を忌み嫌った。男は、自分を救ってくれた恩返しのためだった
のだが、その距離はその後五年間、縮まる事は無かった。

男は、その五年間を国の外れで暮らしていた。

ある日、クルドの少年がその男の元を尋ねて来る。子供本来の好
奇心だろうと、彼は受け入れなかった。だがその後一年間、毎日男
の元に来る少年は、不思議な力を教えて貰う為に足を運んだ。

何故そこまで皆が忌み嫌う力を欲しがるのか？ という質問を投
げかけると、少年はこう口にした。

「誰かが頭の中で叫ぶ。炎を生み、風を纏い、人の助けとなれと」

十歳にも満たないであろう少年の腕には、契約者の証が刻まれていた。

* * * * *

「腕に証?? その少年ってキースなの??」

アンが話を止めて聞く。

「黙ってる、お嬢ちゃん……」

「あ、ごめんなさい……」

ビクツと身体を反応させ、父の背後に隠れるアン。

* * * * *

「マスカル」からの逃亡者は、ある運命を感じ、少年に力を教え、与えた、そして言う。

「これを魔法と呼び、忌み嫌う者は大勢居る。使い方を間違えば、幸福をもたらす力も不幸に変わる事になる。君は既に契約者であり、力を使うべき人間だ。その力を守る為に使え」と。

二人の出会いから更に五年。少年は力を付け、しかし国の民からは異能の者とされていた。

逃亡者は何度も訓練の中止をしようと説得したが、少年は止めなかった。まるで何かに引き付けられる様に、ただひたすら訓練を続けていた。

そんなある日、事件は起きた。

原始的な民族に、北の国「マルカス」が攻撃を仕掛けて来たのだ。彼らの目的は、逃亡者の男。だが、彼を見付ける為に「クルド」の民を殺害して行った。人と戦う事を知らない彼等は、その数を日に日に減らして行く。何故襲われるのか分からない間に。

そして、逃亡者は彼らを守る為に一人、立ち向かう。目的が彼であれば、その捕縛だけで済む筈だったが、「マルカス」の兵士はその男が、この国で「力」を使った事で、全滅させるつもりだった。目撃者は消す。その為に一国を消すつもりだった。少年はその逃亡者の背中を隠れて眺める。

大勢の兵士も、当然の様に魔法を使い、逃亡者と異世界の戦いを繰り返す。

だが、逃亡者は攻撃はしない。ひたすらに「クルド」の民を守ろうとする。

そんな戦いを見ていた「クルド」の民も、次第に戦いに加わる。逃亡者を助ける為に。

強烈な戦いの中で、逃亡者の服は焼け落ち、素肌が露わになる。その肉体には無数のタトゥーが刻まれていた。少年は、自分達に刻印されている印とは、また異質のタトゥーに不思議な感覚を持つ。

そして戦いが数カ月続いた時、「クルド」の民に異変が訪れる。異能の力を使う者が現れ出したのだ。

「マルカス」の兵士は動揺した。そして一年、戦いの日々が続く。遂に「クルド」の民、全員が異能力者となった。その状況に驚いたのは逃亡者だった。

敵は北の本国へと戻り、態勢を立て直す。クルドの民は長い戦いに疲弊し、国の再建に時間が必要となる。

戦いから平和な日常となった時、逃亡者はクルドの民全員に刻印がある事に気付いた。

ある者は背中に、ある者は胸に、首に、脚に…。

「偉大なる魔導士の国」

逃亡者はそう言い、泣き崩れた。

* * * * *

「東の国が魔法技術で栄えたんじゃないのか？ 伝承と全く違うじゃないか…」

今度はバルジーが呟く。

「ええ、ですから伝承は口伝です。あらゆる影響を受けたのでしよう。この後、『マルカス』は近国に通達を出します。魔法都市を滅ぼせと」

「おいおい、魔法都市はその『マルカス』だろ？」

ゼノが眉間にシワを寄せる。

「『マルカス』の魔法技術は国外には出していませんでした。その為、逃亡者とその目撃者を抹殺しに来たのです」

「随分と都合の良い話しじゃねえか、クルドは良い迷惑だぜ…。」

その話しがこいつらの家に伝わる伝承にも影響を及ぼしたのか」

「ええ、元々戦闘を好む種族ではありませんでしたから、近国の襲撃にも防戦一方でした」

「酷い…」

アンはその光景を想像し、目を伏せた。

* * * * *

その防衛戦は更に三年続いた。既に少年も立派な兵士と成り戦っ

ていたが、兵糧も尽き、これ以上の戦闘は不可能となり始めていた頃、「マルカス」が再度攻撃に出て来た。しかも、魔法力を使い、近国もろとも潰す為に。

逃亡者は、「マルカス」兵士に向かって叫ぶ。

「世界を呑み込む悪しき力は、いずれ魔導の英知に滅ぼされるだろう…。我が魂を以って、お前達の祖国と共に闇に封じる！」

逃亡者の身体に刻まれる無数のタトゥーから、闇が広がる。そして、侵略者達を呑み込み、底の無い闇の球へと圧縮されて行く。そこに逃亡者の姿は無かった。

しかし、少年はその逃亡者からある事を託されていた。

この魔導の国を同じく封印し、闇の球が復活する時に備えろと。そして、その時まで力をつけそしてそれまで魔導士である事は知られるな、と。

少年は逃亡者が犠牲となる事を拒んだ。が、全ては自らが招いた戦だと譲らなかった。

闇が全てを包んだ後、クルドの男がその球を持ち、南へと旅立った。

そして、残った民は少年の元に集まる。全員が次にしなければいけない事を理解していた。民に伝わる紋章伝説の元に…。

少年は涙を流し、掌を胸の前で合わせ、光を呼ぶ。
風が渦を巻き、大地から一筋の青い光が、咆哮を上げながら天に昇る。

そして、少年を囲んでいた民達は姿を消す。ただ一人の少年を残して…。

* * * * *

「キースはその球をここに運んだんだね…」

アンは悲しそうにキースを見る。だが、キースは無言で答える事はしない。

「でも、ヒビが入ってるって事は『クルド』が復活するんじゃないのか？」

バルジーがキースに向かって言う。

「いいえ…。例えばあの球が砕けてもまだ、復活はしません」

「全部話しやがれ、面倒くせえ」

ゼノが全く無関係な表情でテーブルに尻を下ろして言うが、キースは首を横に振る。

「今は語る事はできません。それに、まだこの国を形作った話が残っています」

「そう言えば、剣の話が出て無いわよね？」

父の顔を見ながらアンが言う。

「手錠もな…」

「手錠は、伝承の通り私の魔導の力を封印する為の物です。ですから今解放するべき時では無いのです…」

そこまで聞いていたゼノが、両手を組み飽きたように口を開く。

「どうでも良いが、俺には関係のねえ話しじゃねえのか？」

その言葉に、キースはニツと笑い、一言…。

「南の国から来た戦士…、ゼクタ・ノキス・モラウス」

キースの言葉に、ゼノは一瞬で驚きの表情へと変わる。

「何で俺の本名を…」

「貴方の一族の名には、必ず『ノキス』か、『ウキス』の文字が入っている筈です」

ゼノは更に表情を強張らせる。

「何であんた、そんな事を！ 誰にも話した事ねえんだぞ！」

「貴方はクルドから闇の球を運んだ男の末裔ですからね…」

アン・バルジー、そしてゼノ本人も言葉を失い、目を見開いている。

「宮殿に眠る剣は、元々貴方の祖先の持ち物なのです」

「いや、おかしいだろ！ 戦闘民族じゃなかったクルドの民が、剣を持ってたなんてよ！」

「ええ、それはいずれお話ししますが…貴方も私と同じく、異能力者なのです」

唐突に突き付けられた真実に、当然の様に混乱し、否定と肯定がせめぎ合う。

「ね、ねえ、私は？ 私は何か所縁があるの？」

「貴女の祖先は、元々このオアシスで暮らしていた人です…」

キースは爽やかに言うが、ゼノはその表情の奥に何かを感じ取った。が、アンとバルジーは落胆と安堵が入り混じった複雑な表情を浮かべた。

「なんだ…単に宝玉を受け継いだだけか…」

バルジーはどちらかと言うと安堵の度合いが大きいらしい。ホッと息を洩らしていた。

「ちよっと待って…宮殿に眠る剣って言わなかった？」

アンはさらりと流した言葉を思い出した。

「ええ、あなたの方の家に伝わる、もう一つの宝具は宮殿に在り、その一族は現在王族となっています」

「…何だか突拍子もねえ話したが、その一言で納得できた気がするぜ…。ここ最近、何だか妙に王宮に呼ばれてる感覚があんだ…」

「ゼノさんがこの国の解放に拘るのも、恐らく一族の剣が発端でしょう」

「私…宝剣はてつきりキースさんの物だと…」

「私は魔導士だと言った筈ですよ？ 武器は使えませんから。それに、あの剣はただの武器ではありません」

「そりやそうだろ、宝剣って呼ばれる位なんだからよ」

妙に上機嫌となり、笑顔で話を聞くゼノに対し、バルジーがボソツと呟く。

「さっきまで動揺してた癖に…単純な奴…」

「じゃあ、私は何で巻き込まれてんだろう…」

一人納得のできないアンを無視し、ゼノとキースは王宮攻略の方法を話し合っていた。

知らぬ間に陽は沈み、夜となった。

ゼノはこのスラムに残り、城壁の中に取り巻く勢力を纏め上げ、来るべき日まで準備を進める。

キースはその日まで力を封印する事となり、嫌がるアンに再び手錠を架けさせた。

スラム住民から期待の視線を注がれ帰路に付くのは、アン・バルジーに連れられた十二歳の『エクセル』だった…。

鍛冶屋の災難

砂漠の国と言うだけあって、その夜は冷える。

スラムから兵士たちの住むエリアを抜けて、商店に差し掛かる。夜にはなつたが、まだ露店や商店の店先には灯りが灯っていた。兵士の住むエリアからは、石畳で舗装している街道となっており、その石畳もひんやりとした空気を放っている。

商人たちは店先に火を焚き、暖を取りながら客引きをしていた。そんな中の、ある一人の鍛冶屋の男が三人に気付く。

「バルジーさん、あんたとうとう奴隷を買ったのかい？」

馴染みの鍛冶屋に声を掛けられ、ギクリとするバルジーとアン。

「…まだ子供じゃないか…、労働力としては幼すぎるんじゃないですかい？」

男はニタニタ笑いながら、アンを見る。

「何ですか？ 私の顔に何か付いてます？」

アンはキツと睨みつける。

「おお、怖い怖い。お転婆さんが少年を買い付けるとは思えないですよ」

「あんた、私に何を期待してるの？ 股間でも蹴り上げて上げようか？」

「おい、アン。口が悪いぞ」

バルジーが商人に向かって行くアンの身体を制し、自ら脚を踏みだす。

「俺の娘を侮辱する事は許さんぞ？ もう一度その軽口を叩いてみる。即座に縫い付けてサソリの巣に投げ込むぞ」

我が娘を侮辱されたバルジーは、流石に頭に來たのか、その迫力は今まで見た事が無い程だった。

「じよ…冗談ですよ…奴隷反対のあんたが、そんな子供を連れて

るのが新鮮で、つい…でも、そんな子供に手錠掛けて歩いてれば否が応でも目立ちますって…」

言われてみれば当然である。奴隷は本来、買い取ったその時に手錠から解放され、左腕に鋼鉄製のバンドを付けられる。だが、それは衣服で隠れる為に目立たない。

「やっぱり、手錠じゃ目立ち過ぎるわよね…」

「両の手首を結ぶ鎖だけでも、切ってしまうえば目立たないが…お詫びに切っても良いですよ」

その言葉に、バルジーはウンウンと頷き、アンもそれならばと『エクセル』を見るが…ただ一人、その『エクセル』は両手を前に出し、首を激しく横に振る。

「何？ 切っちゃだめなの？」

両手を隠し、背中を向けながら、大きく頷く『エクセル』。素振りには全くの少年である。その中身が二十五歳程の青年で、魔導士とは想像できないリアクションだ。

「しかし、このままじゃ余りに目立ち過ぎる。鎖だけ切ろう」

「でもキースさんは嫌がってるよ…」

「なに、手首の枷を壊そうってんじゃ無いんだ、このまま手錠を付けてちゃこれから先も動きにくいんだ…な、それだけは分かってくれないか？」

子供になった『エクセル』への言葉遣いに多少混乱しながらも、何とか諭そうとする。しかしそれでも『エクセル』は悩んでいた。

「ああ！もう！」

イライラしたアンは、『エクセル』の背中を押して鍛冶屋の店の中へと入って行く。

「お…おい、アン！」

その有無を言わさぬ行動に、流石の父親も驚き、鍛冶屋は愉快そうに笑っている。当の『エクセル』本人は困惑した表情のまま、押される背中に反抗しつつ店の中へ。

遂に観念したのか、『エクセル』は大きな溜息を吐いて身を任せた。

店から更に奥にある作業場へと入る。

大きな炉があり、まだ火が入っている。その前には鉄を鍛える台やハンマーがあり、水桶・砥石等も整然と並んでいた。

「じゃ、その子の鎖をこの台に置いて、両の手首にこの布を被せて下さい」

そう言つて鍛冶屋の男は濡れた厚手の布をアンに手渡す。

外は冷えて来ているが、炉の火が灯った室内はチリチリとした暑さが肌を刺激する。濡れた布が心地良い。

アンは言われたままに枷を包み込むように被せると、鍛冶屋は鎖の穴に焼けた鉄の棒を差し込む。

「ちよつと熱いかも知れねえが、我慢してくれよ？」

鍛冶屋は鎖を熱し、叩き切る手法を取るようだ。

鎖が温まる間に、頑丈そうな分厚い刃の付いた小ぶりの斧を持つて来る。

「ちよつと…それで切るの？」

余りに生々しいその武器に、激しく動揺するアン。

「安心して下さい、こんなの振り回しちゃいけませんから」

鍛冶屋は笑いながら、鎖の上に置くと、反対の手に持つハンマーで斧の背を激しく叩きだした。

「キヤツ！」

激しい金属音が鳴り響き、思わず耳を塞ぐアンとバルジー。しかし可哀そうなのは『エクセル』だった。至近距離で金属の音を長時間聞く嵌めになったのだ。

夜が更けた商店街に金属音が鳴り響く。今までもそう言う事があったのか、それを不思議がる者が居なかったのは幸いではあるが…無気味な音が、暫く続いた。

一時間。予想よりも頑丈な鎖で、熱しては叩き、叩いては焼く。そんな事を一時間繰り返した。

そして、遂に鎖が切れる瞬間が来た。

「ふんんっ！」

汗を滝の様に流している鍛冶屋は、渾身の力でハンマーを振り下ろすと、鎖が激しい金属音を響かせて砕けた。

切れる筈の金属が、「砕けた」事に焦った鍛冶屋は、振り降ろしたハンマーをそのままに、一瞬動きを止めてしまう。

同じく汗まみれのアンとバルジーも、茫然としていた。

鎖が、徐々に塵と化して行く。その不思議な光景をただ茫然と眺めていた。現実では有り得ない金属の豹変ぶりに、専門家の鍛冶屋はさぞ驚いただろう。言葉を失い、ずっとその朽ちる様を見ていた。

そして、完全に鎖が黒い砂へと姿を変えた時、『エクセル』に向かって風が動き始める。それは、次第に強くなり、渦を巻く。

炉に入っている火が、強風に巻かれて口から覗き出す。鍛冶屋とアン親子は、その強風の中、辺りを動揺しながら見渡す。

「え？ 何？？ ちょっと、火が出て来てるよ！」

アンは炉から吹き出す火に驚き、鍛冶屋に言うが、鍛冶屋はどう

やら精根尽き果てた後の怪奇現象に思考が着いて行っていない様子。

「お父さん、ねえお父さん！」

バルジーも…精根尽き果ててはいない筈だが、思考の範疇から既に飛び出した現象に戸惑っていた。

少年を中心に集まった風は、目に見える程の風の渦を作り、中の少年を歪ませる。その中で少年は、手首を繋いでいた筈の、今はチリとなった鎖を眺め、何かを言っている様に見える。

「キースさん…？」

強風に耐えながら、その様子に気付いたアンは言葉を発すると、少年を守るように巻いた渦だけを残し、風が止まる。

「何だ…何が起るんだ…？」

「知らねえぞ、俺は鎖を切っただけだ…」

鍛冶屋と頼りない父親の動揺を見ながら、アンも動揺を隠しきれない。そんな三人の中心に居る『エクセル』が、渦の中から声を上げた。

「皆さん、伏せて！」

その声に驚いた三人は、言われるままにその場に伏せた。

「…何も起きないじゃないか…」

バルジーは伏せたまま、周りを見る。

「はっ…鎖切っただけなんだ、これ以上何か起こってたまるか…」
ゆっくりと中腰になる鍛冶屋。

「おじさん、伏せてた方が…」

アンが鍛冶屋に向かって言った瞬間、『エクセル』を取り巻いていた風が、一気に逆流して行く。

最早爆発に近い空気の壁が三人を襲う。
寝そべり、頭を抱えて悲鳴にならない叫びを発する親子。
爆風で瞬時に掻き消される炉の火。

あれだけの強風を身に纏い、一瞬で逆流させた爆風は、鍛冶屋の作業場にある物全てを四方の壁に吹き飛ばし、斧やハンマー、トン
グ、桶、鍛えて終わった剣や包丁などが突き刺さした。

爆風が収まり、アン親子は恐る恐る頭を上げ、周りを見渡すと、
あれだけ整然としていた作業場の床には何一つ残っていないかった。
テーブルなどの家具も壁に当たり粉碎。更に戦場かと思える程の武器や道具が壁に刺さっている。

そして、その中心には二十歳程の青年が立っていた。

「全く…だからダメだと言ったでしょう…」
そう言いながら、一人吹き飛ばされ気を失っていた鍛冶屋を起こす。

「キースさん…話せるようになったの？」
相変わらず寝そべるアンは、キースに聞く。
「ええ、姿も少し元の私に近付きましたね…」

黒髪ではあるが、長くストレートの髪に、身長も百八十センチ程
になっている。体躯も筋肉質で戦士らしい体つきになり、言葉も話
している。

その変貌ぶりに驚いたのは、誰でもない鍛冶屋だった。

「あんた…何者だ」
視点の定まらない泳いだ目で、アンとエクセルを見る。

「私が何者なのかは、詮索しない方が貴方にとって得策です。鎖
を切ってくれた事には、取り敢えず礼を言いますが、忘れた方が良
いでしょう」

冷やかな目を持つ青年に言われ、思わずコクつと頷く鍛冶屋。

「どうやら、鎖が放たれた事で…若干の力が使える様になりましたか」

手首に残る、最早刻印入りのリストバンドと化した封印を眺めながら言う。そして、それを眺めながら立ち上がるアン。

「でも、良かった。口が利けないとこの先が思いやられる所だったわ」

あれだけの事を経験しておいて、まだ平然と口を開ける女性に、『キース』はニコリと微笑んだ。

「さあ、帰りましょうキースさん、お父さん…お父さん？」

バルジは床に寝そべったまま、気絶していた。頭に大きなコブを作って…。

「…当たったのは水桶ですか。刃物が刺さらなくて何よりです」平然と言つてのけるキースに、アンは背筋を震わせながら言う。

「恐ろしい事を平然と言うんですね…」

キースは、爽やかに笑いながら、野良仕事で鍛え上げた(?)バルジを、軽々と抱え上げ、

「さあ、あまり遅くなるといけません、帰りましょう」

そう言つと、さつさと店から出て行く。

壁にもたれ、立つ事も話す事もできない鍛冶屋は、バックリと口を開け、三人を見送る。

「鍛冶屋さんも災難だったわね…」

「止めても聞かないのが行けないんですよ？ これからはちゃんと言う事を聞いて下さいね」

キース達が店を出た頃、置くから叫び声が聞こえる。二度と来るなど。

「じゃあ、お婆ちゃんにちゃんと説明して下さいね。その為に貴方に来て貰うんですから」

「その為に鍛冶屋一件を休業にしまったのでしょうか？」

二人は冷え切った道を、グロッキーになった父親を抱えて歩いて行った。

アンの祖母は、そんな三人を出迎え、興奮した状態で全てを聞き、涙を流しながら喜んでいた。

只一人、ベッドに転がされたバルジーは二日間目を覚まさなかった…。

伝説の大賢者

鍛冶屋で頭を打ち気を失っていたバルジーに変わり、二日間はキースとアンが野良仕事をこなしていた。立場上、キースが野良仕事をするのは当然だが、祖母は『伝説の大賢者』に野良仕事など、とんでもないと大反対しつつ、バルジーを何とか早く起こそうと看病していた。

「キースさん、こうやって毎日ただ畑仕事をするだけですか？」
スラムでの会話の後、何か大きな運命の旅に出るとばかり思っていたアンは、鋤を持ちながら聞いた。

「敬語は止めて下さい。アンさんは畑仕事に不満ですか？」
ひたすら鋤を地面に入れながら答える。

「生活の一部になってるから、嫌って思った事は無いんだけど…」
アンはスラムの方を眺めながら、少し不満そうに言った。

「こうやって畑仕事をしてる間にも、ゼノさん達は何か準備してるんですよ？」

「彼には彼のやるべき事があるんです。アンさんには、アンさんの役割があります」

アンは、明らかに表情を曇らせてキースを見る。

「だからその、私の役割って何なの！？　ただ『クルドの宝玉』を守ってた一族の末裔でしょ？」

その言葉にキースは手を止めて答えた。

「あの宝玉はクルドを封じた玉ではありませんよ…」

その視線は王宮に向けられていた。

哀しくも見え、愛おしくも見える表情に息を飲むアン。畑に吹く風は乾燥して焼けているが、何処となく冷ややかな印象を受けた瞬

間だった。

「伝説の大魔道士と、あなた方が呼ぶ人の、大いなる力を封じた玉です」

「だから、それはキースさんの力でしょ？」

二人は手を休め、王宮を見ながら話している。

「忘れたのですか？ 私の力はこの枷によって封じられています。わざわざ玉に込めずとも……」

アンはハツとした。そう言えば自分で枷の封印を解いた時に彼は不思議な術を使っていたし、外見も変わった。玉が割れた事で力が戻ったと思っていたが、それならば枷をする必要が無い。

「大魔道士は、他に居るって事なの？　じゃ、あのヒビは一体誰に対して反応したのよ！」

鍬を投げ捨てキースに迫る。

その時、家の方で叫ぶ声が聞こえた。

「アン~~~~！　キース様~~~~！　バカ息子が目を覚ましたよ！」
話しの腰を折られたアンは、ブスッと家を睨む。

「バルジーさんも目を覚ましましたね……。では、皆さんの前で話しましょう。恐らくスラムもそろそろ準備ができる頃でしょうから」

キースはそう言うと、アンの放置した鍬と自分の鍬を持ち、家に向かった。

「バルジーさん、大丈夫ですか？」

「キース様！　こんなバカの心配などして頂かなくても……」

老婆はキースを敬い、畑仕事をさせるなど大反対だった。

「ひでえな母さん…、わざと寝てた訳じゃ無いんだから…」

バルジーも不慮の事故という奴で気絶していただけなので、それを責められてはたまらない。

「ヨークさん…バルジーさん、これから話す事をちゃんと聞いて下さい。先日はバルジーさんが倒れていたのでお話ししませんでした、この家に伝わる、真実です」

ヨークと呼ばれた老婆は、目を丸くした。勿論バルジーも寝起きでの唐突の言葉に、多少慌てていた。

* * * * *

『クルド』での戦いの後、一人の少年が「闇の玉」を持って南に向かい、ある場所に封印をした。

その少年はその近くの街で、所謂ボディガードを生業とし生きて行く事を決めた。

だが、魔導力を使わない為に剣術を覚えようと必死だったが、どうやらその才能は無かった。

仕方無く彼は、一振りの剣に魔導力を込めた。その物質の時を止める力。そうすれば決して刃毀れせず、決して折られる事の無い剣になる。更にその少年は風を操れる為、斬撃と見せかけて放てる技も幾分かは助けになる。

そうしてそこで一生を終える筈だった…。恋をし、子を作り、歳を重ねる。

二十三歳になった頃だった。

ある一人の男が訪ねて来る。その少年こそが、『クルド』を封印した少年だった。

彼は『クルドの玉』を最果ての地へと封印し、その地で暮らそう

としていた。が…『闇の玉』が復活する夢を見たのだと、南に来た青年に言う。

『闇の玉』を運んだ青年は、運命を呪いつつも家族を残して『クルドの玉』の青年と共に旅に出た。

* * * * *

「ちょっと待って…。キースさんって、まさか『闇の玉』を封印した人なの？」

アンが驚いて口を挟む。

「そうです。だから言ってたでしょう…。私は大賢者などでは無いと」

「なら、あの宝玉が割れたのは何故なんじゃ！？ あの宝玉は一体何じゃ！」

ヨークが目と共に口も開いて、驚きと共に言う。

* * * * *

『クルドの玉』の青年の目的は、ただ一つ。

互いの子孫に宿命を与え、そして『闇の力』復活の時に備える。無論、何千年という後の事かも知れぬ為、どちらかが禁術を使い、命を永らえる必要があった。

そこで、名も無いオアシスへと辿り着き、住み付く事にした。

『クルドの玉』の男の名前は、「マルク・キラ・アルテミス」。

『闇の玉』の男の名は、「キース・ガードナー・プロイス」。

結局、キースが禁術で命を永らえ、マルクは力を全て封印した。そしてキースは、その封印と秘密を守る為に、欲深そうな一族に剣を渡す事を決めた。その力を示す事により、彼等はその剣を守るだ

ろうと思ったからだった。

マルクは自らの力を封印した『玉』を、代々語り継ぐようにと子孫たちに伝え、いずれ解放される時には、キースが導き役となる。

二人は、別々の時の流れで千年を過ごす事となる。

* * * * *

「……え?」「……は?」「……いやいや…」

アン・ヨーク・バルジーは同じタイミングで話を止めた。

「『アルテミス』って、ウチの名字じゃない…」

アンが祖母に向かって言う。

「そうじゃの…まさか、まさかのう…」

「あなた方こそ、大賢者マルク様の子孫です。そして、現在王宮に眠る剣は、その宝玉と我々を守る為に大地に突き立て、この王国の周囲を守る城壁の礎となる岩盤に魔力を与え、決して破壊される事の無い、鉄壁を与えているのです」

「この国そのものが、俺達を守る為の物だった…って事か…」

「この壁を快く思っていない人は大勢居るわ…。その元が私たちだなんて、シヨックなんだけど…」

「それより、ワシ等が大賢者の子孫という事がイマイチ納得できないの…」

アン達は口々に言う。

「アンさんが私の封印を解いた瞬間に、宝玉が割れた…。これは、僅かながらアンさんに魔導の力があり、それに呼応した為に眠りから覚めつつあるのです」

キースがアンに向かい言う。その言葉を聞いた瞬間、バルジーとヨークはアンを見る。

「まさかあゝ、私にそんな力なんか無いよ。それに、私の身体に刻印なんか無いよ？」

アンは苦笑いをしながら否定する。だが、その言葉すらキースは笑みで流し、答える。

「刻印は宝玉に封印されていますよ。ほら、私の刻印は『鎌鼬』風を司る霊獣です」

キースはそう言いながら、リストバンドと化した手枷をずらして見せる。その手首にある刻印を、初めてゆっくりと見つめる。そこには、大きな鎌をクロスさせている動物らしき刻印があった。

「この鎌が、スラムの人達には『エックス(X)』に見えたのでしよう…。私が『エクセル』と呼ばれていた所以ですよ」

「私達が受け継いだ…その霊獣は、何ですか？」

アンが不安そうに言う。

「龍です…。クルドが封印された時、地面から現れた光る龍…そのものです」

「霊獣つてより、モンスターじゃねえか…」

バルジーがボソツと呟く。

「…私…身体どこかに龍の刻印が刻まれるの…？ 何かやだな…」

「とにかく、アンさんは宝玉を肌身離さず持っていて下さい。完全に覚醒するまではもう少し時間が掛かると思いますし、恐らく2〜3日中にスラムが動くと思います…」

何だか鵠と対峙している様な、言い知れぬ疑念と不信感、恐怖感

が三人の心に広がっていた。突然の宣告に似た告白で、まだ整理が着いていないのだから当然と言えば当然ではある。

「龍が私の刻印なら、空とか飛べるのかな…」

アンは我が身の事ながら、呑気にポツリと呟いた。

「剣を抜き、ゼノさんに力を与えてはいけません…」

「風の霊獣はキースさんに憑いているんでしょ？ ゼノさんは何の力が？」

「私は魔導力を使わない為に、あの剣を作り上げました。あの剣には魔導の加護が込められています。そして私の子孫…ゼノさんは、幼少よりその力を使い切れる精神力と業を、その身に付けている筈です」

「全てはこの日の為…と、言う訳か」

ここまで来て、ようやくバルジーが口を開いた。

「マルクの魔導力・私、キースの魔剣の力…それを完全に使い切れる人間が揃う時まで、私は待っていました。我々だけでは「闇の玉」の封印が精一杯。それを撃ち滅ぼす日が近付いたのです」

「千年以上前に、勝手に決められてたつてのは納得できないけど、ここから出られるなら何でも良いわ。あの王族たちからの解放もできるのよね？」

「ええ、この王国の砦自体、不落の物では無くなります。まあ、外敵から守る程度であれば、これだけの兵士を抱えていれば大丈夫

でしょう」

「それを聞いて安心したわ、分かった。私、外に出る」

アンはゆっくりと立ち上がり、自分の部屋に向かう。旅支度を始める為に。

「バルジーさん、ヨークさん…。アンさんをお借りしても…？」

「断れる余裕は無さそうだしな、アイツはもう大人だ。本人が決める事だ…」

バルジーは薄らと涙を浮かべながら席を立った。ヨークは眉間を押さえ、涙を堪えている。

娘・孫が、危険な旅に出るのだ。家族としては当然であるが、長年の伝承と、それが宿命とされて来た家族に止める事はできなかった。

夕暮れが僅かな時間を残し、東の空は紫に染まっている。
キースの名の元に、千年の時を経て二人の魔導士が揃った。

悪魔

キースがアン達の家に来て三日が経っていた。

アンは旅支度を終え、キース・バルジーと共に普段の生活を送りつつ、家族との別れを噛みしめていた。

そんな日の夜。

スラムの方から花火が1発上がる。

小さな物だ。周囲の者は興味すら抱かなかったが、アンの家の住人四人は、慌ただしく動き始めた。

家の電気を消し、ヨークとバルジーは二階へと上がり布団に包まる。

「行きますよ」

「ええ、準備はできてます」

キースとアンは、ゆっくりと家を出て、マルキトの中心へと足を向けた。

二級貴族のエリア・畑を抜け、水路を渡り一級貴族のエリアに達すると、その住民は不審そうに彼等を見つめていた。二級貴族が一級貴族のエリアに来る事が珍しく、またその身形も違う為に目立っていた上に、180センチもの身長と体格の良い、どちらかと言えば美形の男を連れている。否が応でも目立つ。

だが、アンはそんな視線も満足そうに堂々と練り歩く。

「どうにも目立ってますね」

「キースさんが目立ってるんですよ」

「そうでしょうか…？ 貴女の事も見ていますが…？」

「二級貴族がこんな所を歩いているから、当然じゃ無い？」

平然と笑いながら会話し、一級貴族の間を歩いている事が、アンには堪らなく楽しかった。

そして、次第に遠くから声上がる。歓声か、叫びか…。

「ゼノさん達が動き出した様ですね」

スラムの住民たちが暴れ出したのだ。所謂クーデターである。その騒ぎに便乗して、キース達は王宮に乗り込み宝剣を奪う。勿論、普通であれば成功する可能性など殆ど無い、無謀な作戦ではあるが、その中心に居るのは「魔道士・キース」である。スラムの住民も、その希望の光にテンションは上がりまくってる。囂としては申し分ない。だが、彼らへの条件として可能な限り人的被害を抑えるように、と出していた。

王族が崩れた後、国を守る者が居なくなれば、住民が危険に晒される為だ。

キース達は足を速めた。貴族街を抜けると、そこは王宮護衛兵士の居るエリアだ。当然一般市民が立ち入れる場所では無い。物々しい雰囲気になっている。

「スラムの騒動で、殺気立ってますね」

キースが平然と言うが、流石にアンはキースの背後に隠れて前を見ようとしなない。

「さて…我々も花火を上げましょう」

背後のアンを全く無視して王宮への第一門の前に立つ。

「待て！ 貴様何用だ！ 特別警戒中にウロウロすると牢にぶち込むぞ！」

門の前には一人の兵士が槍を持っている。その槍は装飾も豪華で、切先もそれは豪華な彫刻が施されている。キースの背後でコソコソ

しているアンは、マントを引っ張りながら文句を言う。

「特別警戒中に門番なんて、あんた下っ端でしょ？ 通しなさいよ」

アンの余計なひと言で、門番は一瞬にして頭に血が上った。

「う…五月蠅いうるさい！！ 女！ 牢にぶち込んでやる！」

凶星だ…。キースは薄ら笑ってしまった。それが更に門番を怒らせる。

「貴様等も反逆者か！ この場で殺してやる！」

叫びながら槍を構えるが、同時にキースも右腕を前に差し出し、

「つい笑ってしまいました、申し訳ない」

そう言った瞬間、門番の顔に何かが当たり、門まで吹き飛び、その衝撃で門が壊れる。

「あ…力加減を間違えてしまいました。気絶させるつもりが吹き飛ばしてしまうとは…」

キースの背後からそれを見ていたアンは、茫然としながらキースに聞いた。

「今…何をしたの？」

「風を集めて壁を作り、彼に当てただけですよ…。封印がどれ程力を残しているか分からないので、少々加減が難しいですが」

そう言いながら、壊れた門を楽々抉じ開け、中に進むキース。

「……あの人に取ったら、普通の事なんだ、これ……」

恐る恐る門番を越え、門を跨いで行く。が、護衛兵士は門が破られた轟音を聞き付け、奥から沸く様に出て来る。

「あわわわ…みんな来ちゃうよ！」

アンは慌てて門から出ようとするが、キースはアンの袖を掴んで放さない。

「ちよっと、離してよ、隠れるんだから！」

「ここに居た方が安全ですよ」

キースはそう言うと、今度は左手を正面に出す。

また吹き飛ばす…アンはそう思い、キースの右腕にしがみ付く。

その瞬間は、何が起こったか分からなかった。ただ目が眩んだ。

「あ、目を閉じて下さい…と、言っのを忘れました」

キースはニコツと笑うが、勿論アンには見えていない。目を開けると、ただ雲に覆われたように掠れた暗闇が広がっている。

「何よ…闇の力なの…？」

「逆ですよ。閃光を使いました。まあ、火の魔力の応用ですが、死ぬ事などありません」

キースの言葉の後、アンはキースの尻を蹴り上げる。目が見えないのに見事にヒット。

「目眩ましを味方にかけてどうすんのよ！」

キースは尻を抑えて言う。

「目が見えない方が、言う事を聞いて頂けると…」

その目は笑っているが、再び蹴りが入る。

そのじゃれ合いの周りには、目を押さえてウロウロしている衛兵が居る。

「視力が戻ると面倒ですね…ちよつと、力加減の練習をしましよ
うか」

方手で尻を庇いつつ、今度は右手を差し出して、門番の時と同じように、数人を吹き飛ばす。

「ダメですね、どうにも…どこまで弱まってるか、分かりません
ボリボリと頭を搔きながら、諦めたように言う。

「死なない程度なら、何でも良いんじゃない？」

そんな事をしている内に、アンの目が視力を戻してきた。

「あ…見えて来た…」

「それはマズイですね、のんびりし過ぎました」

衛兵たちも、次第に戻る視界に、ようやく武器を構え始めた。

「加減の練習はできませんでしたね」

そう言つと、両掌を胸の前で近寄せて、風を呼び込む。

アンはキースの背後にまわり、肩にしがみ付いて堪えるが、次第に強くなる風に衛兵たちは戸惑い、更にキースへと引き寄せられていく。

「うわ、何だ！奴は魔物か！」

「引き寄せられる…うわああ！」

「耐えろ！飛ばされるな！」

暴風と化した風は、全てキースの掌の内に集まって行き、周囲の気圧が落ちて行く。

「…！耳が…痛い…」

アンが気圧の変化に着いて行けず、頭をキースの背中に押し付ける。

「畜生！こうなれば…！」

衛兵の一人が槍を構え、脚の力を抜く。すると、その衛兵は槍を構えた巨大な矢の様にキースに飛んで行く…。が、途中で風がやみ、失速してキースの足元に落ちる衛兵。

それを見下ろし、怪しく笑いながらキースが言う。

「残念でしたね…。私には届きません」

空は気圧が落ち、雲が広がりつつある。更にキースの掌には、圧縮された空気が渦を巻き、放電が始まっている。

それを見た衛兵は、動く事ができない。

「あ…悪魔だ…」

震えながら、つい口から漏らす。

「確かに、悪魔の力です」

そう言つと、その空気の渦を先程の門とは逆に放つ。ゆっくりと進むその渦は、次第に放電を大きくしつつ、衛兵の家と思える壁に触れた瞬間、一気にその空気が膨れる。

空気が弾ける轟音と雷鳴、放電。何かが吹き飛ぶ音、暴風。

キースは風の盾を身に纏い、アンと共にその中で悠々と立っている。

衛兵は尽く吹き飛び、放たれた雷は周囲を焼き、建物も壁も、薙ぎ倒す。

風で作られた壁の中に居たアンは、その全てを見ていた。

風が止んだ後は、キースとアンの足元以外の大地が少し括れ、周囲30メートル程の建造物は姿を消し、その周囲に丸く瓦礫の山を築き上げていた。

「さて、少しこれで静かになるでしょう。行きましょう」

「少しつて…やり過ぎじゃ無い？誰か死んだんじゃ…」

「いいえ、恐らく誰も。あれをここで破裂させれば死者は大勢出たでしょうけど、投げましたから、それまでにかなりのエネルギーは放出された筈です」

「だったら、そこまで集めなくて良かったんじゃない？」
「いいえ、今の状態でもあそこまではできるという確信が欲しかったので…」

アン達は王宮に向かいながら、呑気に話している。
暫くは衛兵も出て来ないだろう。

「枷を嵌めたままでこれだけの事が…外すとどうなるの？」
「知りたいですか？」

キースはニコツと微笑んでアンを見る。

「いや、やつぱ良い…。知ると後悔しそう」
「それが賢明です」

全ての衛兵が気絶している訳ではないが、得体の知れない者に立ち向かえる程の勇者は、ここには居なかった。

総攻撃への狼煙

キース達が中央付近に進出した頃、ゼノ達はスラムから兵士寄宿舎街で暴れていた。

スラムでは日頃、王族から人として扱われずに道具として買われ、飽きると売られるという非道を繰り返していた事が引き金となり、その反乱は一気に膨れて行った。

無論、ゼノを筆頭に四つのエリアのリーダー格、そして彼等が信頼する仲間達は情報の伝達が出来ていたが、事前に漏えいする事を防ぐ為、全員には伝えていなかった。仮に全員に伝わらずとも、この反乱は良しと踏んでいたのだが、予想以上に波及して行った。

「ゼノ！ 西区の兵士は直に抑える！ こちらはどうかだ！」

ゼノに声を掛けに来た男は西区のリーダーの様だった。恰幅の良い五十を少し超えた位だろうか……。

「マークか……御覧の通り、素直じゃねえよこいつ等」

その通り苦戦を強いられていた。マルキトの城門があるエリアの為、そこに居る兵士たちも屈強な男が揃っているエリアなだけに、軍隊経験の無いスラムの男達だけでは、一筋縄では行かない。ゼノは必死で指示を出し、彼等を導こうとするがそれに従える程の統率力もなかなか現れない。当然と言えば当然である。日々訓練をしている兵士と、ただの乱暴者の集まりの喧嘩だから、1対1であれば何とかなる物の、集団戦闘となると話は違う事は明らか。

「だが、もう暫く堪えてなきゃならねえ……。もう少しだ」

ゼノはそう言うと、自らも刃を落とした剣で、戦いの中に飛び込んで行った。

それを見た西区のマークは、その場の布陣を指揮し、西区からの

応援を回す為に戻って行った。

キース達は王宮警護兵士街を進んでいた。

集団で襲ってくる事は少なくなっていたが、それでも単騎突入を繰り返す勇者は後を絶たない。そればかりか、若干数ではあるが王宮警護兵士以外の者の姿もチラホラと見え出した。

「対応が早いですね…。もう中央の騒ぎを聞き付けた人が居る様です」

「ゼノさん達、大丈夫かな…」

「大丈夫だから、これだけの人数で終わってるんでしょう。彼等が頑張ってくれているから、こちらに集結できないんですよ」

キースは兵士たちを吹き飛ばしながら、悠然と歩みを進める。そんな姿にすっかり安心しきっているアンは、キースの背後から離れようとしなない。彼にくっついて居れば安心だと、心から信頼していた。

が…、キースは突然足を止めた。

背後に隠れてキョロキョロしていたアンは、キースの背中に激突し、鼻を押さえて尋ねる。

「なに？ どうしたの??」

「いえね…、どうやらこの先は勇者様達と戦わなくちゃいけないようですよ?」

キースの言葉の後、背中から顔をヒョイと覗かせて正面を見る。

「な…何よコレ!」

一人の男を頂点に、三角の布陣が敷かれており、最後尾には槍を携えた『壁』が広がる。その数は百人には達するだろうと思われる。

「途中を棄てても王宮を守る為に集まったのでしょ…。少々厄介ですね」

「門の所で使ったヤツで吹き飛ばせば？」

「ここまで密集していると、死者が出るかも知れませんよ？」

キースは諦めたように溜息を吐く。そんな様子を背後から見ていたアンは、不安に駆られ身体を震わせる。

アンを振り返り、静かに口を開くキース。

「少し、離れていて下さい…。どうやら此处からは逃げてばかりいては、無駄な血を流す事になりそうです」

逃げると血を流す？　今まで逃げていたとは思えないけど？　そんな事を思いながらも、ゆっくりと下がるアン。

アンが物陰に身を潜めたのを確認した後、キースは自らのマントを捌き右手を地面に付くように身を屈める。

その瞬間、キースの身に風が集まり、渦を巻き、轟音と共に一気に前に弾け飛ぶ。空気に押し出される大砲の様に…。

瞬時に三角の布陣の頂点にまで達したキースは、その場で左方向へと直角に弾かれるように跳び、更に斜めから布陣に突っ込む。正面からの攻撃に対応する為の陣形は、斜めからの素早い強襲に対応する事が遅れる。風によって弾かれる為に、方向転換する度に砂塵を巻き上げ、護衛兵士たちはどこから襲われるか分からなくなっていた。

布陣の中央で、砂塵が撒き上がる時には、その場所にキースが立っており、周辺の兵士たちは倒れていた。そんなキースに、全ての武器が向けられる。

その時…、キースは両手を地面に付き自らを守るようにあつた砂塵を吹き飛ばす。

砂塵の中で何が起こり、どうやって護衛兵士達を倒したのかは皆目見当が付かない彼等は、キースの次の手を見極める為に身構えて

いた。

ただ一人、物陰で見つめるアンは異変に気付いていた。兵士達の少し背後の地面が盛り上がり、静かに割れて行く。

中央に位置するキースは、血管を浮かべながら、力を込めて地面を圧す。徐々に大きくなる割れ目。アンは目を疑った。その割れ目の中に風が向かって行っていたのだ。更に、その風が地面を持ち上げ、割り、大きく地面を砕いた。その中で兵士達は文字通り足元を掬われる形となり、悲鳴と共に皆往々に崩れ去る。

地面の揺れが止まった後、キースの周りを除き、地面が大きく窪みを作っていた。そして、意識がありながらも何かに押さえつけられている様に身動きを取らない兵士達。

「アンさん、割れ目を通らずに抜けて行って下さい」

キースはゆっくりと背中を向けて、王宮へと向かって歩き出した。慌てて彼等を横目に見ながら駆け抜け、キースに聞く。

「なに？何をしたの??」

「見たままですよ。彼等の足元の地面に風を送り込み崩しただけです。まあ、暫く立ち上がって貰っては困るので、少々細工はしています…」

その細工で彼等が立ち上がれない事は理解できたが、一体何をしたのか、さっぱり分からない。

「…最強じゃん…」

アンはポツつと呟く。

「特別な事はしてませんよ…。風で地面を割り、それをクッションにして空気の重しを乗せてるっただけですよ」

「何だか重力異常起こしてるみたいだよ…」

キースに追いついたアンは、後ろを振り向きながら恐ろしそうに言った。

「重力操作は、私にはできません…。細かくは後でゆっくり説明しますよ」

「私には…って、操作できる人も居るんだ…」

背中に冷たい物を感じながら、アン達は遂に警護兵士のエリアを超えていた。

そこには大きな水路があり、所々に噴水がある。恐らく天然の湧水を利用した物だろう。その間隔は区々であり、不自然な配列である事から、容易に想像できる。

「こんなに水源があつたんだ…。こんな所まで入って来るの、初めてだな」

アンはキョロキョロとしながら呟く様に言うと、キースがそれに答える。

「まあ、千四百年前はこんな姿の国になるとは予想してませんでしたよ。もう少しまともな国になると思ってたのですが…」

「まとも…?」

「アンさんは、ここでの生活が当然だから疑問に思う事も少ないでしょうね。さあ、先を急ぎましょう」

「ゼノ…兵士が減って来てないか？」

息を切らしながらマークが言う。

「ああ…俺達はそんなに倒しちやいねえ筈だ…。王宮周辺で、」

エクセル』が派手に動き出したんじゃねえか？」

相変わらず兵士達とドツキ合いをしながらゼノも答える。『エクセル』がそこまで動き出したという事は、警護兵士のエリアを抜ける頃だろう。

ゼノは鎧の隙間を目掛けて力の限り兵士の腹を殴り、マークに言う。

「頃合いだ、マーク。賛同者を連れ王宮に向かう」

「了解だ。先に行つてくれ…必ず他の三方も駆け付ける！」

マークはそう言い残し、城壁まで下がり影へと消えた。

いよいよ…王宮決戦か。

ゼノは意識せずに口元を怪しく歪めた。

この国の、決して表には出ない卑劣な実態と、それを知らずに暮らす『貴族』と呼ばれる者達の解放。今こそ、その時だと…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1746r/>

マジック・パレス

2011年10月6日16時45分発行